

安楽寺だより

第14号

紙面内容

- 2面 親鸞聖人のご生涯（その六）
- 3面 「長男誕生」 若院
- 4面 仏教豆知識（お香について）

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二（八四一）二六〇六

二十二組「人として生まれ、人として生きていく」

先月三月二十日、二十二組の同朋大会が開催されました。大会には、二十二組の各寺院・ご門徒の皆様約二〇〇名のご参加がありました。

高木浩司二十二組門徒会会長、石原堅一二十二組組長の挨拶の後、高山教区真蓮寺住職・三島多聞師にご講演をして頂きました。

三島師は中村久子女史顕彰会代表をされておられ、中村久子さんの生き方を通じ、真宗の教えとの出会いを次の様におはなされました。



中村久子女史 (1897—1968)

「中村久子さんは明治三〇年（1897年）生まれ、三歳の時、突発性脱疽になり、両手両足を切断、その後苦難と悲痛に満ちた日々を送られました。

以前、外国の著名人が『中村久子さんを生み出した日本の文化を学びたい』といわれました。久子さんは三重苦を乗り越えられたヘレン・ケラー女史と会われ、その生き方に強い感動を覚えられました。

久子さんが幼少の頃から少女時代に住んだ高山は、真宗の『伝統・風土』があり、南無阿弥陀仏を称える父母や祖母に育てられました。

久子さんはお内仏によって育てられました。阿弥陀如来をご莊嚴するお内仏、その形を通して浄土のすがたを知る。形だけ（お仏壇）ならば、それは『因習』であり、形を通して（お内仏）浄土世界に出会うのは、『伝統』であります。



講演される三島多聞師

そして、親鸞聖人の『歎異抄』を通して、両手両足のないわが身を引き受けて下さった阿弥陀仏の教えと出会われ、わが身の事実を善知識と受け止めることができたのです。

久子さんは『人として生まれ、人として生きていく』深い意味に出会われたのです。合わすことができないう両手ですが、お念仏の教えに出会って苦難の境遇と障害の身を真正面から引き受けて、力強く生き抜かれました。「三島師は私たちに力を込めて語られました。

『人生に絶望なし 如何なる人生にも決して絶望はない』（中村久子）

親鸞聖人のご生涯

その六 赦免の後、関東へ

越後に流罪になって五年、建暦元年（一一二一年）親鸞聖人は赦免を受けられました。追うように師法然上人の訃報も届きました。

聖人は京都には戻られず、建保二年（一一二四年）四十二歳の時妻子とともに関東に向かわれました。当時関東は、鎌倉に幕府が置かれ、新しい日本の中心地として、さまざま可能性を持つ地域でした。

しかし、その頃関東各地は干ばつに見舞われ、飢饉が広がっていました。

苦難の旅を続ける途中、上野之国（群馬県）佐貫の地で、浄土三部經千部読誦の行法を始められました。惨状を前に、人々の平安を祈られずにはおられなかつたでしょうが、それは古来からの祈禱仏教そのものでした。

阿弥陀如来のはたらきにすべてをまかせきれず、未だに自力に執心している自分の姿に改

自力執心の自分に改めて気づく



聖人三部經読誦の地・宝福寺（像は性信房）

めて気づいた聖人は、すぐに読経を中止されました。こうした体験から、生きるために他をかえりみる余裕などない人々こそ、阿弥陀如来に救われるべきと確信されたのではないでしようか。その確かな覚悟を持って関東各地の教化に向かわれたと考えられます。

平成25年 安楽寺法要日程

四月十三日（土） 定例法話 午前・午後
津島市 藤井秀規師

五月十三日（月） 春季永代経法要
午前十時・午後一時半
西尾市 柳野明仁師

六月十三日（木） 定例法話 午前・午後
昭和区 荒山 修師

七月十三日（土） 定例法話 午前・午後
昭和区 八神正信師

八月 四日（日） 孟蘭盆会法要
午前十時・午後一時

（初盆法要は八月三日）住職
九月十三日（金） 秋季永代経法要
午前十時・午後一時半
稲沢市 榎山正樹師

十月十三日（日） 定例法話 午前十時
坊守

十一月十二日（火） 十三日（水） 報恩講法要
午後一時半・四時 午前十時・午後一時半
昭和区 荒山 修師

十二月十三日（金） 定例法話 午前・午後
昭和区 八神正信師

長男誕生 若院

去年十一月二十一日に我が家に男の子が生まれました。名前は、去年が辰(龍)年ということもあり、また龍のように強く大きく生きてほしい願いも込めて「龍生(たつき)」と、名付けさせていただきました。

予定日より一週間ほど早い出産でしたが、3370gもある元気な男の子でした。出産に立ち会ったのですが、子供が生まれた瞬間は何とも言えない感動と、妻がそれまでの苦痛が嘘のように安堵の表情をしていたことが今でも思い出されます。

最初対面した時は、とても頭が長い子だなというのが印象でした。母子ともに健康で一日目は病院の方で預かっていただき、二日目からは母子同じ病室でいよいよ子育てが始まりました。何もかもが初めてのことで新鮮でもあり、大変でもあり、嬉しくもあり、改めて父母の大変さを身をもって感じる事ができたような気がします。

今は、四ヶ月が経ち、日に日に抱っこする腕が重くなっていくのを感じ、成長しているのだなと実感できます。特に表情がと



ても豊かになってきました。泣き声も大きくなりましたし、笑顔も前より多くなり、初めのものを見れば不思議そうな目をします。まだまだこれから大変な時が沢山くると思います。その度に自分もそうして育てていただいたいと思ひます。

また皆さんにお会いできた際には、どうか可愛がっていただけますよう宜しくお願い申し上げます。

東別院奉仕研修のご案内

今年度も中区の東別院で奉仕研修が開催されます。奉仕研修とは、仏様のお話を聞いたり、みんなで話しあったり、清掃をしたりと一日を別院で過ごし、日ごろの「私」を見つめる研修会です。安楽寺のご門徒様が、毎年数名ご参加いただいています。

今回は、「あなたにとってのお寺とは、親鸞聖人とは」というテーマで、皆様の生活の中でお寺、聖人はどう生きているのか、どうはたらきかけてくださるのか、どう願われているのか。一緒に考えていきたいと思ひます。ご参加お申し込みお待ち申し上げます。

参加費：二千円(昼食代を含みます)

持ち物：念珠、勤行本、筆記具、雑巾、軍手

同朋手帳(お持ちの方) 参加証(お持ちの方) 肩衣(お持ちの方)

日程：午前九時 受付開始

午前十時～午後四時二十分解散

期日：四月二十四日、五月二十八日、

六月二十七日、六月二十八日

九月二十七日、十月二十八日のうち一日

申込：安楽寺(〇五二・八四一・二六〇六)

または別院教化事業部(三三二・九五七八)

☆ **開催日の二〇日前まで**にお申し込みを

仏教豆知識

第十四回



お香について

お香の起源は、仏教の発祥地であるインドなどの南方の国々で、酷暑の気候による悪臭を防ぐために用いられていました。

一つは、自然の樹木で自生する高木の「白檀」と、埋れ木の一種である「沈香・伽羅」など加熱すると良い芳香を放ちます。

『法華経』には、『悉(ことごと)く雑華抹香を以て七宝の妙塔を供養すべし』とあり、中国の古書「僧史略」には、「香は穢(けがれ)を解き、芬(かおり)を流し人をして聞かんことを願しむ」とあります。

もう一つは、粉末の香料を糊などで細長く線状にしたものを「線香」といい、

現在では、日常のお給仕に使用されています。日本には江戸時代中頃に中国より伝わりました。線香は決して香炉の中の灰に立てるのではなく、香炉の大きさに合わせて折り、火を点じて横置きし、燃香します。

仏教では、香を焚くと不浄を払い清浄なる信念を起こすといわれ、香を焚いて仏前にお供えします。お内仏にお供・お花・灯明とともに良き香りのお香で荘厳することが、阿弥陀如来への大切なお給仕と、心して行うようにしたいものです。



東日本大震災から二年が経過しまし

た。しかし、復興には長い年月が掛かりま

す。郷土を復興する希望を持って取り組

む人々の活躍を聞くと頑張つてほしいと強

く思います。しかし、支援は十分にされて

いるとは思えません。国の復興予算が無関

係の事業に使われている報道には腹立たし

さを覚えます。特に、福島原発事故による

除染作業など避難者への支援の遅れ、自主

避難者に対して助成金減額など精神的に

も生きていく希望が持てなくなる施策が

始まっています。原発事故避難地域への補

償だけでなく、放射性廃棄物処分方法を

決めることが、最も緊急の復興施策です。